

干潟の名称	羽地内海（饒平名）
干潟の所在地	沖縄県名護市屋我地島饒平名地先
干潟の面積	約 80ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	主に砂底、低潮帯はサンゴ礫底
干潟植生	高潮帯：オヒルギ、メヒルギ、オオハマボウ 中潮帯：コアマモ 低潮帯：ウミジグサ
干潟の特徴	屋我地島南岸に位置する羽地内海沿岸で最大の干潟。高潮帯は大部分がコンクリート護岸で分断されているが、屋我地小中学校付近には、まとまった規模のオヒルギ群落が残されている。しかしながら、このマングローブ林を含む海岸線全域で大規模な親水護岸（緩傾斜護岸）工事が進行しており、高潮帯から中潮帯上部にかけてのエコトーンが消失しつつある。中潮帯上部の滲出水の認められる部位には、コアマモ群落が形成される。中潮帯から低潮帯上部にかけては、粒径の均一な中粒砂底となっている。低潮帯下部はサンゴ礫まじりの砂底となり、ウミジグサとウミヒルモが低い被度で散生する。赤土の流入により干潟の生物生息環境の多様性が急激に失われてきている。
生物相の特徴	本調査結果から饒平名干潟の底生生物相は、次の4タイプの群集に識別される。1. 高潮帯マングローブ群集（****、シレナシジミ、ハマガニなど）；2. 中潮帯～低潮帯砂底群集（****、ホウシュノタマガイ、ヘラサギガイ、ヤエヤマスダレ、ミナミコメツキガニなど）；3. 中潮帯転石帯群集（カンギク、シマベッコウバイ、マガキ、オウギガニなど）；4. 低潮帯サンゴ礫底群集（キクメイシモドキ、メナガオサガニ、スエヒロイボテガニ、ハネジナマコなど）
調査者氏名	藤井晴彦，名和純，山本雅子，友利優子
調査年月日	2002年5月15日

干潟の名称	羽地内海（呉我）
干潟の所在地	沖縄県名護市呉我地先
干潟の面積	約30ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	砂泥底および礫底
干潟植生	オヒルギ、メヒルギ、イボタクサギ
干潟の特徴	羽地内海南西岸の開放的な入り江に形成された干潟。干潟には、奈佐田川（我部祖河川）が流入する。河口域には、2000年頃までメヒルギの優占するマングローブ林が発達していたが、その大半が伐採されて埋め立てられ、現在は河口左岸にわずかに片鱗を残すのみとなっている。干潟は、河川滯筋付近および中潮帯域では礫底となり、低潮帯域には細砂底が形成される。近年、河川流域からの赤土堆積が激しさを増し、生物生息環境の多様性が急激に失われてきている。また、道路建設に伴う埋め立て計画（干潟のある入り江をショートカットする）が進行しており、干潟の大半が消滅することが予想される。
生物相の特徴	呉我干潟の底生生物相は、次の4タイプの群集に識別される。1. 高潮帯マングローブ群集（****、ドロアワモチ、ゴマセンベシアワモチ、シレナシジミ、ベニシオマネキ、カノコセビログニなど）；2. 中潮帯転石底群集（カンギク、ミヤコドリ、シマベッコウバイ、タガソデモドキ、マスオガイ、イワムシの一種（ <i>Marphysa</i> 属の1種）、ヒライソガニの一種など）；3. 中潮帯礫まじり砂底群集（ウミニナ、カヤノミカニモリ、アラスジケマン、ナタマメケボリ、タテジマユムシ、フタハオサガニなど）；4. 低潮帯砂泥～細砂底群集（カニノテムシロ、ホウシュノタマ、ヘラサギガイ、スタレハマグリ、ニホンスナモグリ、ギボシイソメ科の一種など）
調査者氏名	佐藤正典，藤井晴彦，名和純，小澤宏之，田村常雄
調査年月日	2002年6月13日

干潟の名称	羽地内海（我部井）
干潟の所在地	沖縄県今帰仁村我部井地先
干潟の面積	約 20ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	主に泥砂底、湾口部はサンゴ礫底
干潟植生	オヒルギ、メヒルギ、オオハマボウ、イボタクサギ、ソナレシバ
干潟の特徴	羽地内海西部の入り江に発達した泥質干潟。干潟には、湧川など 4 本の小河川が流入する。湾口部を塞ぐヤガンナ島と河口部との間、すなわち入り江全域が泥質干潟として干出する。羽地内海で最も遮蔽的な海岸環境。高潮帯は、コンクリート直立護岸により分断されているが、それに沿って、オヒルギ、メヒルギ、オオハマボウ群落からなるマングローブ林が形成されている。その海側縁辺部の中潮帯は礫まじりの泥底となり、低潮帯にかけて砂泥底、泥底へと推移する。湾口部のヤガンナ島付近は、サンゴ礫まじりの砂底となる。激しい赤土の流入により干潟の生物生息環境の多様性が急激に失われてきている。
生物相の特徴	マングローブ林内からは、****、シレナシジミ、ドロアワモチ、ベニシオマネキといった種が優占的に見出された。その前面のソナレシバ帯には、フトヘナタリが群生していた。河川滞筋沿いの礫砂底からは、ハザクラが多く出現した。また、マングローブ林縁辺の礫まじりの泥底（中潮帯上部）には、ハナグモリ、コゲツノブエ、オキナワハクセンシオマネキが多く見出された。中潮帯下部の礫まじりの泥底からは、****、ヘナタリ、オキシジミ、****、タテジマユムシ等が見出された。低潮帯泥底には、カニノテムシロが多かった。湾口部のサンゴ礫まじり砂底では、ニワトリガキ、アラスジケマン、サメザラモドキ、多毛綱のウロコムシ類が優占的に見出された。
調査者氏名	藤井晴彦，名和純，小澤宏之，山川英治
調査年月日	2002年7月23日

干潟の名称	泡瀬
干潟の所在地	沖縄県沖縄市泡瀬
干潟の面積	約300ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	泥砂底、砂底、サンゴ礫底
干潟植生	メヒルギ、ソナレシバ
干潟の特徴	泡瀬干潟は、沖縄島最大の内湾、中城湾北部に位置する琉球列島最大級の干潟である。干潟は、高潮帯から低潮帯にかけて塩性湿地→砂泥干潟→サンゴ礫干潟→海草藻場と推移する。高潮帯部位の大部分は、埋め立てられてコンクリート護岸となっているが、断片的にメヒルギとソナレシバ群落からなる塩性湿地が残されている。中潮帯部位は、湾奥部で砂泥干潟、湾口部よりではサンゴ礫干潟となる。低潮帯部位は、100ヘクタール以上の広大な海草藻場が発達する。そこには、リュウキュウスガモ、コアマモ、ボウバアマモ、ウミジグサ、ウミヒルモなど11種の海草が、モザイク状に群落を形成している。海草藻場の沖側は、サンゴ礁へと続いている。現在、泡瀬干潟では、東部海浜開発事業による180ヘクタールの埋め立て工事が進行している。
生物相の特徴	泡瀬干潟の底生生物相は、次の4タイプの群集に識別される。1. 高潮帯塩性湿地群集（フトヘナタリ、イロタマキビ、****、ゴマセンベイヤワモチ、ベニシオマネキ、ハサミシャコエビなど）；2. 中潮帯砂泥干潟群集（ヘナタリ、****、カニノテムシロ、ハナグモリ、****、アラスジケマン、オキナワハクセンシオマネキ、ヒメシオマネキ、ヒメヤマトオサガニなど）；3. 中潮帯～低潮帯サンゴ礫干潟群集（カンギク、シマベッコウバイ、アツムシロ、ホソスジイナミ、ヤエヤマスダレ、オウギガニ、フタバベニツケモドキなど）；4. 低潮帯海草藻場群集（イボヨフバイ、リュウキュウサルボウ、ホソスジヒバリ、ハボウキガイ、リュウキュウザルガイ、リュウキュウバカガイ、リュウキュウアサリ、ソデカラッパ、コブヒトデ、ハネジナマコ、クリイロナマコなど）
調査者氏名	藤井晴彦，小澤宏之，高橋洋生，山川英治，佐々木美紀
調査年月日	2002年6月25日

干潟の名称	佐敷
干潟の所在地	沖縄県佐敷町新里～富祖崎地先
干潟の面積	約60ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	泥砂、細砂、サンゴ礫
干潟植生	高潮帯：メヒルギ、ハマジンチョウ、ソナレシバ 低潮帯：ウミジグサ
干潟の特徴	沖縄島南部東海岸中城湾の湾奥部南端に位置する。干潟には、浜崎川、苗代川など4本の小河川が流入する。干潟の西側3分の1（約30ヘクタール）は、1970年代の埋め立てにより消失している。高潮帯は、コンクリート護岸（垂直および緩傾斜）で分断されているが、断片的に塩性湿地（マングローブ）が残されている。その内のひとつ浜崎川河口付近の湿地には、ハマジンチョウおよびメヒルギ群落が形成されている。中潮帯から低潮帯にかけては、泥砂～砂泥～細砂底と推移する。湾口部よりの富祖先地先では、サンゴ礫となり、ウミジグサとウミヒルモが低い被度で散生する。干潟全域を埋め立てる計画（マリンタウンプロジェクト）が存在する。
生物相の特徴	本調査結果から佐敷干潟の底生生物相は、次の4タイプの群集に識別される。1. 高潮帯マングローブ群集（****、ベニシオマネキ、オキナワアナジャコなど）；2. 中潮帯泥底群集（カワアイ、****、ヒメヤマトオサガニなど）；3. 中潮帯下部～低潮帯砂底群集（****、ヘラサギガイ、フタハオサガニなど）；4. 低潮帯サンゴ礫底群集（サメザラモドキ、ケブカガニ、フタバベニツケモドキなど）
調査者氏名	藤井晴彦，名和純，小澤宏之，大古場正
調査年月日	2002年7月9日

干潟の名称	具志・大嶺
干潟の所在地	沖縄県那覇市具志および大嶺地先
干潟の面積	約120ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	砂泥底およびサンゴ礫底
干潟植生	オオハマボウ、ヨシ、メヒルギ、ソナレシバ
干潟の特徴	干潟最奥部の具志地先には、オオハマボウ、ヨシ、メヒルギ、ソナレシバの群落に覆われた塩性湿地と泥干潟が形成され、その沖側の瀬長島付近で砂干潟となる。さらに大嶺崎にかけてサンゴ礫干潟へと推移し、約70ヘクタールの広大な海草藻場へと続いている。しかしながら、2003年度からのバイパス建設工事により、塩性湿地植物群落は剥ぎ取られ、泥干潟の3分の一程度が消失した。また、サンゴ礫干潟と海草藻場域の大半（50ヘクタール以上）が那覇空港滑走路拡張事業による埋め立て予定区域となっている。
生物相の特徴	具志・大嶺干潟の底生生物相は、次の4タイプの群集に識別される。1. 高潮帯塩性湿地群集（フトヘナタリ、オイランカワザンショウ、クビキレガイ、ゴマセンベシアワモチ、タイワンアシハラガニ、ヤエヤマシオマネキ、ハサミシャコエビなど）；2. 中潮帯泥干潟群集（カワアイ、ヘナタリ、オキシジミ、ヒメシオマネキ、ヒメヤマトオサガニ、イトゴカイ科など）；3. 中潮帯サンゴ礫干潟群集（カンギク、****、イソアワモチ、ヒメアサリ、****、サメザラモドキ、ウロコムシ科の1種、オウギガニ、ヒメヒヅメガニなど）；4. 低潮帯海草藻場砂底群集（アワムシロ、イボヨフバイ、リスガイ、イワカワハゴロモ、ハヤテシロガネゴカイ、ヤハズアナエビ、フタバベニツケガニ、ソデカラッパ、ギボシムシ科の1種、オオイカリナマコなど）
調査者氏名	佐藤正典，藤井晴彦，名和純，小澤宏之
調査年月日	2002年6月11日

干潟の名称	塩屋・大保川
干潟の所在地	沖縄県大宜味村大保～塩屋
干潟の面積	約20ha
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	泥砂底および礫底
干潟植生	オヒルギ、メヒルギ、ソナレシバ、
干潟の特徴	塩屋湾奥の大保大川河口域に形成されている河口干潟。河口付近には、オヒルギとメヒルギ群落からなるマングローブ林が形成されている。その下流側は、礫干潟～泥干潟と推移する。長年にわたる赤土流入の影響を受けて干潟の生物生息環境の多様性が失われつつある。
生物相の特徴	大保大川河口干潟の底生生物相は、次の3タイプの群集に識別される。1. 高潮帯マングローブ群集（フトヘナタリ、オイランカワザンショウ、****、ゴマセンベシアワモチ、ドロアワモチ、カノコセビロガニ、アミメノコギリガザミ、フタバカクガニ、ヤエヤマシオマネキ、ハサミシャコエビなど）；2. 中潮帯礫砂干潟群集（カノコガイ、ウミニナ、マクガイ、マガキ、ハザクラ、イソメ科の1種、ヒメヒライソモドキなど）；3. 中潮帯～低潮帯泥砂干潟群集（ヘナタリ、****、アラムシロ、オキシジミ、スダレハマグリ、イオウハマグリ、クシケマスオ、マテガイの1種（ <i>Solen</i> 属の1種）、ソトオリガイ、スナモグリ科の1種、ヒメヤマトオサガニ、タテジマユムシなど）
調査者氏名	佐藤正典，藤井晴彦，名和純，小澤宏之
調査年月日	2002年6月12日

干潟の名称	大浦
干潟の所在地	沖縄県名護市大浦
干潟の面積	約 25ha
干潟の地形タイプ	河口干潟、前浜干潟
干潟の底質	礫底、泥底、砂底
干潟植生	メヒルギ、オヒルギ
干潟の特徴	大浦湾奥一帯に発達する河口および前浜干潟。干潟は、大浦川河口域とスギンダ川河口（楚久地先）を中心として形成されている。大浦川の河口右岸には、オヒルギ、メヒルギ群落からなる規模の大きいマングローブ林が発達している。その下流側は、礫干潟と泥砂干潟が形成されている。スギンダ川河口の干潟は、中潮帯から低潮帯にかけて、礫干潟→泥干潟→ウミヒルモの生育する砂干潟と推移する。この干潟は、湾を縦断するバイパス橋梁工事（2004年工事完了）により広範囲に埋め立てられ、工事土砂流出の影響を受けている。また、大浦湾干潟全域が赤土流入の影響を受けつづけている。
生物相の特徴	大浦湾干潟の底生生物相は、次の4タイプの群集に識別される。1. 高潮帯マングローブ群集（マドモチウミニナ、イロタマキビ、****、ドロアワモチ、フタバカクガニ、オキナワアナジャコなど）；2. 中潮帯礫砂干潟群集（ウミニナ、カノコガイ、マルアマオブネ、マスオガイなど）；3. 中潮帯泥干潟群集（カワアイ、ヘナタリ、カキノテムシロ、****、ヒメヤマトオサガニなど）；4. 低潮帯砂干潟群集（イボヨフバイ、ナミノコザラ、マテガイ科の1種、キンセンガニなど）
調査者氏名	藤井晴彦，鹿谷法一，名和純
調査年月日	2003年7月1日

干潟の名称	億首川
干潟の所在地	沖縄県金武町
干潟の面積	約20ha
干潟の地形タイプ	河口干潟、前浜干潟
干潟の底質	砂利まじり砂底、粗砂底
干潟植生	メヒルギ、オヒルギ
干潟の特徴	億首川の河口両岸とその地先に発達した干潟。河口左岸には、オヒルギ、メヒルギ群落からなるマングローブ林が形成されている。その前面の中潮帯域は、赤土の堆積した砂利混じりの砂底となる。河口右岸は、近年の緩傾斜護岸整備事業により人工海岸化されている。河口地先には粗砂干潟が形成され、低潮帯域でウミジグサの生育する海草藻場となる。
生物相の特徴	億首川河口干潟の底生生物相は、次の3タイプの群集に識別される。1. 高潮帯マングローブ群集（マングローブアマガイ、フトヘナタリ、マドモチウミニナ、イロタマキビ、フタバカクガニ、オキナワアナジャコなど）；2. 中潮帯砂干潟群集（カンギク、マルアマオブネ、リュウキュウウミニナ、カヤノミカニモリ、アラスジケマン、リュウキュウシラトリ、オキナワハクセンシオマネキ、ミナミコメツキガニなど）；3. 中潮帯～低潮帯粗砂干潟群集（ホウシュノタマ、アツムシロ、イボヨフバイ、リュウキュウマスオ、オウギガニなど）
調査者氏名	藤井晴彦，名和純，成瀬貫
調査年月日	2003年6月3日

干潟の名称	漫湖
干潟の所在地	沖縄県那覇市
干潟の面積	約 25ha
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	サンゴ礫、泥岩礫、砂泥、泥
干潟植生	まばらなメヒルギ林が見られる。シマシラキやシイノキカズラ、イボタクサギなどが混じる。
干潟の特徴	人口稠密地帯に取り囲まれた潟湖である。市街地を流れる国場川が流れ込んでいる。国道の橋が潟湖上を通り、岸边も多くは護岸されている。泥質部は深く、強い硫化水素臭がある。
生物相の特徴	沖縄の干潟としては種数が少なく、限られた種のみが多く出現した。打ち上げ貝の記録により、かつてはウミニナ科巻貝が複数種いたと思われるが、今回の調査では発見されなかった。
調査者氏名	藤井晴彦, 名和 純, 巖道 治
調査年月日	2004年9月29日

干潟の名称	与那覇湾
干潟の所在地	沖縄県平良市および下地町
干潟の面積	約 80ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	泥砂底、砂底、サンゴ礫底
干潟植生	シマシラキ、メヒルギ、ソナレシバ
干潟の特徴	与那覇湾沿岸に発達した砂質前浜干潟。干潟には、咲田川をはじめ多数の湧水が流れ込み、潮位 10cm 以下で湾全体の半分以上が干出する。高潮帯域は、シマシラキ林で縁取られるが、近年の緩傾斜護岸整備事業により急速に剥ぎ取られつつある。その前面は、メヒルギの散生する泥砂底または転石帯となる。中潮帯から低潮帯上部にかけては、広大な砂底域が形成されている。湾口部付近は、ウミジグサとリュウキュウスガモの優占する海草藻場が発達している。
生物相の特徴	与那覇湾干潟の底生生物相は、次の4タイプの群集に識別される。1. 高潮帯海岸林縁群集（マングローブアマガイ、ヒメウズラタマキビ、クビキレガイ、****、ヤクジャマガニ、フタバカクガニ、ミナミオカガニ、ベニシオマネキなど）；2. 中潮帯上部転石帯群集（マルアマオブネ、ミツカドカニモリ、リュウキュウウミニナ、ヒバリガイモドキ、オハグロガキモドキ、ハシリイワガニモドキなど）；3. 中潮帯下部～低潮帯上部砂干潟群集（ホウシュノタマ、タママキ、ミナミコメツキガニ、フタハオサガニ、ブビエスナモグリなど）；4. 低潮帯海草藻場群集（フトコロガイ、ヒメツキガイ、ウラキツキガイ、シロヘソアキトミガイ、クロナマコ、ニセクロナマコなど）
調査者氏名	藤井晴彦，岩男道治，泉れい，岩崎誠
調査年月日	2003年6月15日

干潟の名称	宮良湾
干潟の所在地	沖縄県石垣市宮良、磯辺
干潟の面積	53ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	全体的に隆起サンゴ礁からなる岩場と巨礫のミックスした平礫であり、礫の間にサンゴ碎片や粗砂が堆積している。また、宮良川と磯辺川の河口部にはほとんど粗砂だけからなる干潟が見られる。宮良川のヒルギ林前面から河川流心に向かっては傾斜が強く、ほとんどが砂質である。
干潟植生	岸辺は全域に渡って護岸が施されており、塩性湿地は存在しない。宮良川の河口付近の護岸が途切れるところにソナレシバやミルスベリヒユを主体とした草地がある。宮良川下流域では岸辺にオヒルギとヤエヤマヒルギからなるマングローブ湿地が発達しており、天然記念物に指定されている。
干潟の特徴	宮良川から磯辺川までの間 1Km にわたり沖合 400m 程までが干潟となる。そのうち、200～300m までの間は少し地高が低く、調査時には水深 10cm 程であった。磯辺川の右岸は大浜海岸で、ここは養浜工が施されており人工海岸となっている。しかし、その地先に干潟が出現する。また、宮良川左岸にも小面積であるが干潟が出現する。
生物相の特徴	護岸や護岸下の転石地帯にはオカヤドカリ類、キバアマガイ、タイワンタマキビなどが見られる。また岸辺には津波で転がされた巨岩が点在し、そこには****類、ウスイロヘソカドガイ、リュウキュウアマガイ、イシダミアマオブネ、ホソスジウズラタマキビが棲息している。岸辺の傾斜のある粗砂帯は破碎帯にあたるためか、砂中に生物は少ない。巨礫帯ではマルアマオブネ、カヤノミカニモリ、ヤドカリ類が多く、石の下にはホシムシ類、オウギガニ類が出現し、ドロアワモチ、ルリマダラシオマネキ、タテジマユムシ、アラスジケマン、エガイなどが見られる。また、砂地の表層に泥が堆積したところにはカキノテムシロやオサガニ類が多く、ゴカイ類も多産する。砂質のところにはヤドカリ類、ハウシュノタマが這い回っており、埋在生物としては、オサガニ類、イトゴカイ類、スジホシムシモドキ類が比較的多い。また、タママキガイ、スナモグリ類も棲息している。干潟の沖部先端に近いところは、ところどころに海草が生育している（ウミヒルモ、マツバウミジグサ）。ここには多毛類の棲管がパッチ状に点在している。埋在生物としてはスナモグリ類が比較的多く、イソハマグリ、カワラガイ、タママキ、ゴカイ類の他、メナガオサガニが棲息する。宮良川河口近くの砂質帯は、全体的に生物相が貧弱であり、ヤドカリ類、マルアマオブネのほか、イソハマグリ、スジホシムシモドキ、スナモグリ類が出現した程度であった。宮良川河口近くのヒルギ林内では、****類、ヨコバサミ類、シオマネキ類、アマガイ類が多く見られる。また、石の下や岩穴にはオウギガニ類やドロアワモチが棲息しており、ヒルギ林の根元付近にはヒルギハシリイワガニが多い。林内の地高の高いところには、オカヤドカリ類やミナミアシハラガニが棲息しており、オキナワアナジャコの塚も存在する。水辺沿いの泥地には****が多く、オサガニ類も棲息している。ヒルギ林前面の干潟には、オキナワハクセンシオマネキとヒメシオマネキが多く、埋在生物としてはアナジャコ類、ホシムシ類、イソメ類が棲息する。
調査者氏名	鈴木孝男, 西平守孝, 谷崎樹生
調査年月日	2004年9月13、14、17日

干潟の名称	崎枝湾
干潟の所在地	沖縄県石垣市崎枝
干潟の面積	42ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	干潟はほとんどが砂質であり、サンゴ礫を多く含んでいる。そのため、下層まで砂質のところは少なく、サンゴ礫や小石のために掘り返すのは困難をともない、深さ10cm程しか掘れないところも多い。そのようなところは、10cm以下はサンゴ礫が堆積しており、酸化的である。他では、表層は酸化的であるが1~5cm下に還元層が存在しているところが多く見られる(その厚さは、ところにより異なる)。
干潟植生	干潟の西側一帯の、岸から50mよりも沖側の砂質部分は海草帯となっており、ウミヒルモ、ベニアマモが優占し、リュウキュウスガモや、ところによってはマツバウミジグサが混じる。転石や岩の上には紅藻、サボテングサ、カイメンソウ、アオモグサ、ウスユキウチワなどが生育している。
干潟の特徴	崎枝湾の湾奥に広がる前浜干潟であり、1.5Km程の幅で沖合300mぐらいまでが干出する(9月)。全体的に平坦な干潟であるが、ところどころに岩が点在する。岸辺はほとんどが護岸となっている。
生物相の特徴	干潟でも転石や礫が存在すると、それを基質として利用する貝類が出現する。リュウキュウウミニナ、カニモリ類、カネツケキクザルが見られ、イワフジツボ、ヒザラガイ類、カイメン類、ホヤ類も付着している。また、キイロダカラ、ハナビラダカラも比較的多く見られた。干潟表層には、ホウシュノタマ、マルアマオブネ、カスリモミジガイ、クロナマコ、アツムシロ、タケノコカニモリが見られ、埋生生物としては、カワラガイ、ヤエヤマダレ、イソハマグリ、マスオガイ、ヒロクチソトオリガイ、タママキが少数出現したが、場所によって出現種の構成は異なる。また、メナガオサガニやチロリ類が見られる他、ヒメギボシムシやアマミスジホシムシモドキが局所的に分布しているところがある。護岸下の転石にはカノコガイ、マルアマオブネが見られ、護岸上には、タイワンウズラタマキビ、ヘリトリアオリ、コウダカカラマツなどが棲息している。東寄りの干潟では護岸下の地高が高いところにソナレシバを主体とした塩性草地が小面積ではあるが存在する(5x100m程度)。ここにはオカヤドカリ類が多く棲息しているほか、クビキレガイも多い。オカヤドカリの着底直後と思われる幼体はよくこの場所を利用しているようだ。打ち上げ海藻の下にはイソミミズやリュウキュウタマワラジムシが多い。****類も少数棲息する。
調査者氏名	鈴木孝男, 西平守孝, 谷崎樹生
調査年月日	2004年9月12, 15日

干潟の名称	船浦
干潟の所在地	沖縄県竹富町西表島船浦
干潟の面積	約 50ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	砂泥底、砂底
干潟植生	ヤエヤマヒルギ、オヒルギ、ヒルギダマシ、ソナレシバ
干潟の特徴	干潟には、西田川、ヒナイ川、マーレ川、ヤシ川が流入する。これらの河川の河口域には、ヤエヤマヒルギ-オヒルギ群落からなる大規模なマングローブ林が形成されている。その前面は広大な砂干潟となり、大潮干潮線付近で海草藻場に推移する。
生物相の特徴	船浦干潟の底生生物相は、次の3タイプの群集に識別される。1. 高潮帯マングローブ群集 (マングローブアマガイ、イロタマキビ、キバウミニナ、シレナシジミ、ヤクジャマガニ、フタバカクガニ、ベニシオマネキなど) ; 2. 中潮帯砂干潟群集 (ヘナタリ、ホウシュノタマ、オオカニノテムシロ、ウメノハナガイ、タママキ、ヤエヤマスダレ、アラスジケマン、ブビエスナモグリ、フタハオサガニ、ミナミコメツキガニ、タテジマユムシなど) ; 3. 低潮帯海草藻場群集 (イボヨフバイ、ユキガイ、ウミケムシ、トウゾクテッポウエビ、ギボシムシの1種など)
調査者氏名	藤井晴彦, 山下博由, 名和純, 大古場正
調査年月日	2003年7月14日

干潟の名称	浦内川
干潟の所在地	沖縄県竹富町西表島浦内
干潟の面積	約40ha
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	砂泥底、砂底
干潟植生	ヤエヤマヒルギ、オヒルギ、ヒルギダマシ、ソナレシバ
干潟の特徴	浦内川は沖縄県で最大の流量を持つ川であり、その河口域にはヤエヤマヒルギ-オヒルギ群落からなる大規模なマングローブ林が形成されている。河口右岸には、約2kmにわたって砂干潟が形成されている。
生物相の特徴	マングローブ林内では、ベニシオマネキ、ヒルギハシリイワガニ、フタバカクガニが優占的に見出された。また、ヒロクチカノコ、イロタマキビ、シレナシジミ、シモフリシオマネキ、ヤエヤマシオマネキ、ヒメシオマネキなども確認された。砂干潟では、ウメノハナガイ、ミナミコメツキガニ、スナモグリ類、タテジマコムシが優占的に見出された。
調査者氏名	藤井晴彦, 山下博由, 名和純, 大古場正
調査年月日	2003年7月13日

干潟の名称	川平湾
干潟の所在地	沖縄県石垣市川平
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	内湾干潟
干潟の底質	<p>広大な白砂の砂質干潟を主体とし、ウミヒルモやウミジグサの海草帯、湾奥の砂泥地、転石帯、隆起石灰岩からなる岩場、小規模なマングローブ湿地、内湾性のサンゴ礁など多様な環境が見られる。今回の調査地では、湾口部（ライン A）はしまった藻場の砂底で表面から 1cm 以深に還元層が見られた。沖側にウミヒルモ・ウミジグサ群落が見られる。湾中央部（ライン B）も湾口部の底質に似るが、より泥分が多く還元的で、背後に小規模なヒルギ林を擁する。湾奥部（ライン C）は淘汰のよい細砂底で沖側にウミヒルモ群落が見られる。同じく湾奥部（ライン D）には小河川の影響があり、上部の調査地点は粒土が粗く、下部に行くにしたがい粒土が小さくなる。</p>
干潟植生	<p>湾中央部の潮間帯上部に小規模のヒルギ群落（ヤエヤマヒルギ、オオハマボウ）が見られる。干潟上にはウミヒルモやウミジグサの海草群落が見られる。</p>
干潟の特徴	<p>石垣島の北西部にある川平湾の奥に広がる内湾干潟。黒真珠養殖が行われており、内湾でありながら富栄養化や赤土流出などの環境破壊の影響が比較的少ない貴重な環境である。しかし、無酸素水塊の発生が確認されるなど、環境悪化に対する注意が必要である。広大な砂質干潟を主体とし、海草帯、湾奥の砂泥地、転石帯、隆起石灰岩からなる岩場、小規模なマングローブ湿地、内湾性のサンゴ礁など、極めて多様な環境が見られる。</p>
生物相の特徴	<p>今回の調査は湾口部（ライン A）、湾中央部（ライン B）、湾奥部（ライン C・ライン D）の 4 ラインにおいて行った。その結果、103 種の動物と 6 種の海草類が確認された。調査地の干潟表面には広範囲にカスリモミジガイとそれに寄生するカスリモミジヒトデヤドリニナが生息している。潮間帯の上部にはミナミコメツキガニが群れを作る。湾口部ではミナミムシモドキギンチャクやナガイソギンチャク科の 1 種（<i>Acthelmis</i> 近似属の 1 種（J））など埋在性の刺胞動物と寄生性貝類のハブタエセキモリ、オオクチキレが生息する。潮間帯下部には海草帯が発達する。湾中央部の潮間帯上部では小規模なヒルギ林があり、その塩生湿地ではハクセンシオマネキ、カンギク、マルアマオブネ、コゲツノブエ、ヒメウズラタマキビが多く、その他にカヤノミカニモリ、ミツカドカニモリなどのカニモリ類、ヒラマキアマオブネ、ニセヒロクチカノコ、イロタマキビ、ヒルギハシリイワガニ、ナキオカヤドカリなど多くの生物が見られる。潮間帯中部では底質が還元的でイトゴカイ科が優占する。湾中央部・湾奥部の海草帯とその周辺では、埋在性のタママキ、エマイボタン、スダレハマグリなどの二枚貝類が豊富に生息する。またそれらを捕食するホウシュノタマなどのタマガイ類も数種生息する。スジホシムシの巣穴に共生するナタマメケボリが生息する。ライン D では一時は絶滅状態とされたヒモイカリナマコに寄生する二枚貝ヒノマルズキンが多い。ヨコヤアナジャコ、マルテツノヤドカリ、ツメナガヨコバサミが多く、河川の影響からネジヒダカワニナが生息する。</p>
調査者氏名	木村妙子, 木村昭一, 久保弘文, 栗原健夫
調査年月日	2004 年 8 月 27 日, 28 日

干潟の名称	名蔵湾
干潟の所在地	沖縄県石垣市名蔵
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	内湾干潟, 河口干潟, 潟湖干潟
干潟の底質	基本的には砂質底。湾北側の内湾干潟(ラインA, B)では潮間帯上部は粗砂礫質, サンゴ粗砂質底, 下部では砂質底, 高密度のリュウキュウアマモなどの海草帯が発達する。潟湖干潟・河口干潟(ラインC)では砂質底。砂底では還元的環境。湾南側の内湾干潟(ラインD)では酸化的環境の細砂底, サンゴ粗砂底。下部には藻場が発達していた。
干潟植生	ヤエヤマヒルギ群落, リュウキュウアマモ, ウミジグサ, リュウキュウスガモ群落
干潟の特徴	石垣島内では川平湾に並ぶ代表的な干潟だが, 汚水排水や赤土流失により汚染が進んでいる。広い内湾干潟の奥に名蔵川が注ぎ, 河口干潟とマングローブ林が発達する。河口干潟の前面は州が伸びて半閉鎖され, 潟湖干潟の環境でもある。底質は砂底が基本だが, 海草帯, 転石など多様な環境が認められる。
生物相の特徴	今回の調査は湾北部(ラインA, B), 河口部(ラインC), 湾南部(ラインD)の4ラインにおいて行った。その結果, 全体で117種の動物, 7種の植物が確認された。湾北側はカヤノミカニモリ, タテジマユムシ, スジホシムシ, タテジマヨコバサミが優占していた。潮間帯上部の転石にはカンギク, マルアマオブネなどが付着する。アマモ場にはニセヒロクチカノコ, キンランカノコ, 小型のモツボ類など葉上に多数生息し, また, カブラツキガイ, アラスジケマンなどの埋在性の二枚貝類も豊富に生息していた。同じく埋在性のスジホシムシモドキに寄生するスジホシムシヤドリガイも多い。一時は絶滅状態とされたヒモイカリナマコに寄生する二枚貝ヒノマルズキンも生息する。潟湖干潟・河口干潟では, マングローブアマガイ, カノコガイ, ヒメカノコなどのアマオブネ類, コゲツノブエ, カヤノミカニモリ, ミツカドカニモリガイ, リュウキュウウミニナ, ヘナタリ, ネジヒダカワニナ, アンバルツノヤドカリなどのヤドカリ類が, 干潟表面に多数生息していた。マングローブ湿地にはヒメシオマネキ, コメツキガニ, ミナミコメツキガニなどのカニ類, タマキビ類, ****が多かった。湾南側には海草帯に埋在性のカブラツキガイ, ヒメニッコウガイ, イトゴカイ科などの多毛類が多かった。同じ湾内でも出現種は環境により大きく異なり, 結果的に非常に出現種数が多かった。
調査者氏名	木村妙子, 木村昭一, 久保弘文, 栗原健夫
調査年月日	2004年8月29日, 30日

干潟の名称	前良・後良川
干潟の所在地	沖縄県八重山郡竹富町西表
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	河口干潟および前浜干潟の連続体
干潟の底質	砂質。一部、マングローブ林付近は軟泥質
干潟植生	岸寄りにマングローブ林（ヤエヤマヒルギ、オヒルギ、マヤブシキ、ヒルギダマシ）。砂浜にソナレシバ、アダン、ユウナ。海藻は、アヤギヌ、ヒトエグサなど。
干潟の特徴	河川は小規模であるが、河口から前浜一帯に広大に広がるきわめて平坦な干潟である。岸寄りに立派なマングローブ林が成立しており、多様性の高い環境が作られている。
生物相の特徴	ほとんど全面にミナミコメツキガニが豊富に分布する。また、シオマネキ類やオサガニ類の多様性が高い。マングローブ林付近では、キバウミニナの大型個体の死殻が見いだされたが、生貝は発見されなかった。
調査者氏名	向井 宏，佐々木美貴，松本里子
調査年月日	2004年4月3日，5日

干潟の名称	星立
干潟の所在地	沖縄県竹富町西表島星立
干潟の面積	約30ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	砂底、粗砂底
干潟植生	ヤエヤマヒルギ、オヒルギ、ヒルギダマシ、マヤブシキ、シマシラキ
干潟の特徴	与那田川河口右岸には、ヤエヤマヒルギーオヒルギ群落からなるマングローブ林が形成されている。干潟中潮帯域は粗砂底となっているが、緩傾斜護岸および養浜工事により流出した土砂に覆われ黒色還元状態に汚染されている。低潮帯域は、リュウキュウスガモ、ベニアマモ、ウミシヨウブ群落からなる海草藻場が発達している。
生物相の特徴	マングローブ林内では、キバウミニナ、イロタマキビ、ベニシオマネキ、オキナワハクセンシオマネキ、ヒルギハシリイワガニ、フタバカクガニが優占的に見出された。粗砂干潟では、アツムシロ、ミナミコメツキガニ、スナモグリの一種 (<i>Calliastina sakaii</i>) などが見出された。海草藻場では、ウミシヨウブの葉上にキンランカノコが高密度で付着していた。また、ソデカラッパ、サメハダヒメガザミ、ヨツアナカシパン、ホシムシの一種なども見出された。
調査者氏名	藤井晴彦, 山下博由, 名和純, 大古場正
調査年月日	2003年7月15日